

原 著

投影同一化を起こしていた男児との遊戯療法を通して ——Preambivalence から Ambivalence へ——

石 野 泉* 門 野 香**

An Examination of the Concept of Projective Identification : A play therapy case study with a 7-years-old boy who progressed from preambivalence to ambivalence.

SUMMARY

Projective identification is based on an ego structure centered on splitting as primitive defense. Projective identification causes countertransference in the analyst and interferes with psychoanalytic work. However, understanding client's projective identification helps the therapist to appreciate the client's psychic reality in an empathic manner.

Case material is presented to illustrate the clinical functions of projective identification. The boy was 7-years-old who had difficulty in maintaining stable object relationships and controlling his temper. He used projective identification so as to maintaining splitting of "all-good" from "all-bad" ego states. He could not make clear differentiation between self and object representations.

As he recalled infantile traumatic experiences in the therapy process, he gradually integrated self-representation and object-representation.

I. はじめに

クライアント（以下 cl と略す）の切実な悩み、苦しみ、孤独、不安を我々はどうすれば真に理解することができるのであろうか。cl の病理を心的現実 (psychic reality) として、理論的にも、また治療者（以下 th と略す）自らの内面を通して真に理解、共感するとはどのようなことなのであろうか。

例えば、cl の孤独とはいかなるものか。猛獣の檻に一人れられたような恐怖なのであろうか。

Jersild, A. T (1975) は孤立した状況に置かれた子どものことを「異国にいる不案内で寄る辺ない訪問者のようなもの」と表現している。幼い頃のことを思い出してみよう。親にひどく叱られた時、親が子を思う愛情はあったとしても、親自身の問題のためにこちらに関心を示してくれなかった時、あるいは弟や妹ができたことによって愛情が失われたと感じた時など、誰も子どもながらにひどく傷つき寄る辺ない孤独と不安に打ちひしがれたことだろう。

しかし、年齢を重ねるにつれ、また、周囲の関わり方や環境によって、この孤独をありのまま感じることは少なくなる。孤独を感じるというよりはむしろ、自分は認められていないのではないか、評価されていないのではないか、などと感じるようになる。例えば、上司から自分

* 京都女子大学児童学科非常勤講師
Izumi Ishino

** 臨床心理士
Kaori Monno

の間違いを注意されたことで自分の全人格を否定されたような気分になったり、恋人のいつもと違う目つきや態度から「嫌われたのではないか」とひどく傷ついたり、あるいは通りすがりのものにジロっとみられただけで「バカにされた」「見下げられた」とカッとなったり、これら全ての反応の背景には孤独が存在する。なぜなら、相手の態度から「自分が評価されていないのではないか」「愛されていないのではないか」「見下げられ、認めてもらっていないのではないか」と感じるということは、自分自身がいかにかに孤独で他者の愛情や関心を求めているかということの裏返しだからである。逆に言えば、人は他人から評価され、認められ、愛されていると感じることによって、はじめて、自分自身、自己というものの存在価値を見出している部分がある。成人し、経済的にも身体的にも十分に自立できるようになり、上司や恋人、ましてや通りすがりのものに見捨てられても、現実には生きていく上で何の支障もないにもかかわらず、これほどまでに相手の評価が気になるというのは、幼い頃に味わったあの孤独感がその背景にあるからである。まるで幼児が親に見捨てられたかのような恐怖と不安、孤独が大人になった今も何かをきっかけに再燃してくるのである。

Jersild, A. T (1975) は「我々は強い文化的な圧力から、自らの感情を率直に表すことを奪われている。」「我々は子どもに涙を隠し、そして自分の激しい怒りや恐れや威張りたい気持ちを飲み込んで胸を詰まらせることを求めるのである。」と述べている。幼いころから“泣くこと”や親に対して“異議を申し立てること”“反抗すること”については禁止あるいは抑制され続けてきた結果、ありのままの感情を素直に感じることに、ましてや表現することができなくなっているのである。その大部分の感情、衝動は無意識の世界に追いやられ防衛に防衛を重ねて非常に複雑な状況に陥っている。ただし、無意識に抑圧されたこれらの感情、衝動が決して消失したわけではないというところが重要である。

自らの感情を無意識に閉じ込めた結果、寂しさ、寄る辺なさ、不安、愛情欲求などの衝動はどこかにそのはけ口を求め続け、何らかの形で

間接的な形で表出してくる。つまり、多くの場合これらの衝動は対象に投影され、まるで相手が自分に対して敵意を持っているかのように感じられるのである。

cl と出会っていると、th の受容的な態度でさえも彼らにとっては冷淡で、理解されていないと感じる人々が多いのに気づく。それはこれまでいかに人々から疎外され、拒否され、迫害され、傷ついてきたかを物語っている。彼らの心の根底には常に「自分は評価されていない」「どうせこの人(th)も自分をあざ笑っているに違いない」「バカにしているに違いない」という迫害意識がこびりついている。だから本当の意味における治療同盟、信頼関係を築くことは容易なことではない。一見、治療に意欲的でいかにも自己洞察が進んでいるように見えても、それは「thにとって良いクライアントでなければならぬ」「thに受け入れられるように振舞っている」だけの場合もある。もちろんこのclの心の奥底にも計り知れない孤独があり、迫害意識がある。「自己洞察を進めなければthから見捨てられるのではないか」という不安から、見捨てられ再び傷を深めるのはあまりにも辛いことなので「良きクライアント」を演じているのである。

このように、人々は相手に自分の過去の対象関係、特に痛ましい関係にまつわる感情や衝動を現在の対象に映し出している。Kernberg, O. F. (1972) は「心的病理のほとんどは内在化された対象関係の病理構造の表れであり、精神分析的状况は転移の中で過去の内在化された対象関係の活性化を許す」と述べている。

さらに、自己表象、対象表象の区別が曖昧な境界例患者にとっては、対象からの「拒絶感」「被害感」は深刻である。彼らは自分が完全に受け入れられていないと感じるや否や激しい攻撃性を向けてきたり、また、この逆に対象が受容的と感じられれば、すぐさま万能的(all-good)な母親像を投射し、「自分は万人から愛されてしかるべき」と過度に愛情を求めてくる。このような人々の孤独とは“荒涼な砂漠を一人さまよっている”とでも表現すればよいのか、その孤独と不安、恐怖から逃れるために、幻想

的な fantasy を対象に求めて止まないのだ。ともかく彼らは、それが同一の対象であるにも拘らず、ある時は対象に過度に恐怖心を抱き、敵対的な態度を取り、またある時には、態度を急変させ、激しい愛情欲求を示したりするのである。しかし、このような cl は th に対して矛盾した ambivalent な感情が自分の中にあるとは全く意識されてはいない。

Greenson, R. R. (1967) によれば、上記のような cl にとっては「分析者の像が善と悪の対象に分裂 (split) し、その両者がクライアントの中で分離した存在となっている」いわゆる preambivalence の状態にあるとしている。このような cl は常に「周りの者は皆自分を攻撃してくる敵だ」と被害感、疎外感を強く抱いているので、th の中立的で受容的な態度でさえも、「やっぱりこの人も自分を拒否している!!」と自分の敵意を相手に投射して、th が拒否的だから自分はこんなに傷つけられ、怒らされているのだと憤怒する。また、これとは逆に乳児のように自分を抱き上げ愛情を注ぎ、自分の苦痛を全て取り去ってくれるような対象を渴望していることも事実である。しかし、この相反する矛盾した衝動を同時に保持することは出来ず、どちらか一方が突出して現れ、交互に繰り返される。

つまり cl は split した対象に cl の不安定で部分的な自己表象、対象表象を投射し、それを再び取り入れて同一化するという、投影同一化を起こしているのである。

Kernberg, O. F. (1986) は「投影同一化から投影へと、発達のライン」を提唱しているが、これは preambivalence から ambivalence へ、つまり分裂していた対象が一つのまとまりをもった対象として捉えられ、ambivalence を感じられるようにまで至るといふ発達の過程を示している。

さらに、Kernberg, O. F. (1987) は「境界例患者の原始的な転移の解釈に対するアプローチが、部分対象関係から全体対象関係へという変質、すなわち(対象恒常性に先立つ発達段階を主として反映する)原始的転移からより発達したエディプス期の転移へという変質を引き起こ

す可能性がある」と述べている。

本論では、投影同一化の視点から、cl の計り知れない孤独、寂しさ、寄る辺なさ、愛情飢餓感、苦しみ痛みをより深く理解し、cl の心的現実をよりリアルに捉えることを目的とする。また、投影同一化を理解することにより、治療同盟の崩壊、逆転移、治療の中断を防止する一助としたい。さらには、事例を通して、Kernberg, O. F. が言うように投影同一化を起こしていた cl が split していた対象を統合していくことができるのかを証明していきたい。

II. 理論

まず、投影同一化を理論的に理解するために投影と比較することが有用と考えられる。

以下に Kernberg, O. F. (1986) の理論をまとめたものを示す。

- 1) **投影同一化**は、splitting に基礎を置くプリミティブで一次過程的な防衛機制である。まず、耐えられない心的経験を愛か憎しみに分裂させ対象に投射する。そして、投射した対象を善か悪に捉え、取り入れる。ambivalence の矛盾を避け葛藤から自我を防衛するために分裂が強化され対象を支配しようとする。内的に起こってくる感情、衝動については対象が引き起こさせるものであって、自らのものではないとする。例えば、自分の攻撃性を正当化するなどである。
- 2) **投影**は、抑圧に基礎を置くより成熟した二次過程的な防衛メカニズムである。まず、耐え難い経験にまつわる感情、衝動を抑圧し、次にその感情を対象に投影する。同時に現実検討能力が機能しているためその対象関係を何とか維持しようと対象から距離をとる。そして、ambivalence に耐えうるのであり得るのである。

「投影同一化は境界例患者の転移操作の中心である」(Kernberg, O. F. 1975) として仁木 (1995) は「境界例患者における投影性同一視*の理論的考察」を行っている。その中で、「境界例の病理は自己表象と対象表象とが分離されているものの、それぞれの表象が統合されていな

い時期から、それらが統合され対象恒常性を獲得する以前の状態を示していることが理解される。」(林, 1992)と示している。これは Kernberg, O. F. (1992)が投影同一化について「対象恒常性の確立よりは前のしかし共生的発達段階よりは後の発達段階」に由来すると述べていることと合致する。

境界例患者の場合、「欲求不満の影響下で all-bad な対象イメージによるそのイメージの汚染に対する防衛としての all-good な対象としてのマザーリングの原始的理想化は優勢になるのである。」(Kernberg, O. F. 1972)つまり、強烈な欲求不満のために「良い」自己表象・対象表象と「悪い」自己表象・対象表象とを統合できず、むしろ防衛的側面から分離され続けた状態に陥っているのである。「投影同一化は耐えられない心的経験から逃れるための」、また「不快な状況を排除する (expulsion) ことによって抜け出す」ための「防衛手段なのである」(Kernberg, O. F. 1984)

このような自我の split の防衛的存続のために境界例患者は「ポジティブな取り入れとネガティブな取り入れの統合(integration)」(Kernberg, O. F. 1966)が起こらない。「そのため、結果として彼らは一貫した対象と同一視できないのである。」そして、「このような部分的な取り入れと、投影性同一視による部分的な対象関係を維持せざるを得ないのである。」(仁木, 1995)このことは、治療者との転移関係の中で Kernberg, O. F. (1966)の言う「二者択一的(alternative)に活性化される対象関係」(仁木, 1995)として示される。過度な理想化を起こしたかと思うとすぐに th に対し激しい攻撃性を向けてくるなどと言うのはこれである。「それはあたかも、二つの自己があるかのようであり、それらは同じ強さを持ち、記憶の中では切り離されてはいなかったものの、情動的には相互に切り離されており、意識体験において交代しあうようであった。」(Kernberg, O.F, 1983)「cl のこのような th への矛盾した感情の二者択一的な活性化は同一の対象へのアンビバレンスに耐えるこ

とのできない自我の弱さのためであると考えられる。」(仁木, 1995)

次に示す事例は自己表象、対象表象の境界が曖昧なために投影同一化を起こし、行動上 split を示していた男児が1年半の治療の中で split していた自己表象、対象表象を徐々に統合させ、th に対して ambivalence を経験し、ある程度一貫した対象関係を築けるようになった過程を示している。

III. 事例と考察

幼少期より LD 児として診断され、保健所などの関わりがあった男児 (来所当時7歳)。

主訴：感情のコントロールが悪く、お友達との関わりがうまくいかない。(母親からの聴取による。)

家族構成：父・母・姉(小4)・本人(小1) D 君、週1回50分、全67回の遊戯療法を行う。

第1期

cl は相互交流の持ち難い子どもで、治療の中でも恣意的なルールで常に cl が勝利を収めようとしたり、cl が先生役になって「5秒で問題をしろ」と指示したりと th をゲームの駒のように支配的に動かそうとする。そして、思い通りに行かないことがあるとすぐにカッとなって怒り出し、激しい敵意を向けるという衝動的な一面があった。しかし、カッとなった後すぐに甘えた声で th に「かくれんぼうしよう」などと擦り寄ってくる態度の豹変も見られる。

cl が“先生役になって課題を出す”というのは、Freud, A. (1936)のいう「攻撃者への同一視」である。これまでいかに親や教師に、また友達からも上から押さえつけられるように支配され、傷ついてきたかがうかがえる。彼自身、ゲームのルールの理解や言葉の理解が難しい面もあったので、集団の枠に入れるために、また、社会性を身につけさせるためという名目で、親や教師は彼の自己意識を自己の存在価値を踏みにじってきたのだ。自己の存在を傷つけられた彼は深く傷つき、本来であれば親や教師に向くはずの攻撃性が十分に意識化されないまま現在

* 投影性同一視と投影同一化は同義語である。

に至り、その攻撃性を th に向けたのである。まさしく、転移である。“先生役になって課題を出す”ことにより攻撃性を発揮するということは、その外傷体験を克服しようとする試みでもあり、また同時にそれにまつわる不安や傷つき寄る辺なさなどの衝動を意識せずにすむという防衛機能をも含んでいる。

#6には前回作ったプラレール (cl が“まちのえき”と名づけたもの) が片付けられていることから40分間激しく怒り続ける。そして、散々怒ったあげく、cl「先生、怒ってるんやろ」「僕が(先週)片付けしなかったから怒って“まちのえき”を壊したんやろ。」と言う。

clは40分もの間、激しく怒り続けてはいたが、この怒りについては自らのものとは全く意識されていない。つまり、敵意を th に投射し、それを再び取り入れて同一化する、投影同一化を起こしていたのである。cl にしてみれば、#5 にせっかく作ったプラレール (cl にとっては自らの生きる場、理想郷を意味するもの) が片付けられているということは、自分の全てを否定され、拒否され、見放されたと感じたのだろう。事実としては単に“プラレールが片付けられている”だけなのに、そこに過剰に反応し激しく攻撃してくる。これもまた、転移反応である。つまり、cl は単に“プラレールを片付けた”ことに対して怒っているのではない。もし、そうであればプラレールをもう一度作ればいいのだが、彼が th に対して何より訴えたかったのは、『先生もやっぱり僕を拒否するのか!』『見捨てるのか!』『どうしてもっと愛してくれないんだ!』ということである。これまでの現実の世界で cl は彼の衝動性や攻撃性の激しさを周りから理解されず、深く傷つき、それはあたかも自分の全てを拒否され見捨てられたかのような衝撃であったに違いない。その見捨てられ感が彼の存在までもを脅かすような非常に悲惨なものであったので、その不安や傷つきを意識することを避けるために、(それらの衝動が意識されそうな場面に出会うといつでも)その衝動を“自分のもの”ではなく“相手のもの”“対象がもたらすもの”と感じるようになっていった。そうすることによって、自らを自らの存在価値を

守っていたのである。

また、「僕が片づけしなかったから怒って“まちのえき”をこわしたんやろ」と言った彼の心の奥には“片づけをしない子なんてとんでもない!”“価値のない子だ”という非常にサディスティックな超自我が存在する。

#4にもプラレールの踏み切りで th のカエルが cl の走らせる列車に撥ねられ、th が「あーあ、撥ねられて死んじゃった。」と介入すると cl は困惑の表情を浮かべ、2周目には列車の方を転倒させる。このことを見ても、cl がいかにかプリミティブでサディスティックな超自我を持ち合わせていたかがよくわかる。先述したように彼は自らの敵意を自分のものとして感じる事ができない。にもかかわらず th のカエルを撥ねてしまった。th からは「カエルが死んだ」と言われ、困惑する。『自分にはカエルを殺してしまうような、そんな敵意は存在しない。』『そんな悪いことをするはずがない。』『殺すなんてもってのほかだ。』『なんて悪いやつなんだ。』と激しく自我を攻撃する cl の超自我の存在がうかがえる。だからこそ、2周目にはカエルにぶつかる前に列車を転倒させ、マゾヒスティックに攻撃性を自らに向けたわけである。

このようなプリミティブでサディスティックな超自我が形成される過程について仁木(1995)は次のように述べている。「防衛としてのプリミティブな理想化により、さらには投影性同一視のために、bad な自己表象と対象表象(端的には、自己にとって危険である親イメージ)と、good な自己表象と対象表象(プリミティブに理想化された親イメージ)が防衛的に split され、超自我前軀態を構成するのである。」

つまり、幼少期より多動傾向にあった cl は親から禁止されること、行動を抑制されることが多かったに違いない。「じっとしていなさい」「ちゃんとしなさい」「ちゃんと直しなさい」と言われ続け、その度に彼の自主性、自発性が損なわれ、彼の存在価値までもが失われてしまったのだろう。彼は自分自身の存在価値を見出す前に「お前はなんて悪い子だ」「ダメな子だ」「価値のない人間だ」ということを叩き込まれ、all-bad な自己表象、対象表象を持たざるを得な

かった。しかし、そう感じることはあまりに苦しく辛い経験だった。そのため、その痛ましい外傷体験にまつわる衝動は自我に統合されるというよりはむしろ、防衛的に split した all-good な自己表象、対象表象を築く結果となり、投影同一化により、ますます split が強化されていったのである。

このような内在化された対象関係の病理について、Kernberg, O. F. は不適切なマザーリングだけではなく、体質的な要因にも触れている。「体質的な要因とは、攻撃性の過剰さに加えて、攻撃を中和する能力の欠如、不安耐性の欠如までが含まれる。要するに、体質的に神経が過敏で、潤の立ちやすい子どもであるというのである。これらの子どもは、良い対象を取り入れることが難しく、ともすれば内部の悪い部分（攻撃性）を対象に投影して、いわゆる、悪い対象関係を優勢にしやすい。あるいは、扱いが難しいだけに、母親もともすれば子どもに自分の悪い部分を見せやすいと言うことになる。」

（牛島，1991）

cl の病理については、母親の養育態度にその原因が求められることが多いが、単に母親にその全責任を負わせることよりは、むしろ、養育環境や母子相互関係で生まれてくる成因についても考慮する必要がある。

だが、ここで今、一番重要なことは cl の心的現実がどのようなものか、cl がいかに孤独で、悲惨な状況に置かれているかということである。

おそらく、彼が見ている世界というのは周りの者は全て敵であり、自分のことなど理解してくれる者などなく、戦場で一人戦う兵士のような気分ではないだろうか。辛うじて援軍と思われた th でさえも自分を裏切り、自分の砦であった“まちのえき”を破壊してしまった。このように考えると cl の“プラレールを片付けた”ことに対する過剰なまでの反応は納得のいくものである。彼は必死で戦っているのである。だからこそ cl にとって th の態度が受容的と感じられるときには過度に信頼を寄せ、またその逆に“プラレールを片付けた”だけで自分を切り捨てた、裏切られたとひどく傷つくのである。th のある一部分のみを捕らえてそれを good か

bad に分け、そこへ同一視せざるを得ないほど彼の自己表象、対象表象は曖昧で、融合的なのである。自分一人では到底戦えないので常に援軍を待ちわび、一方でたとえそれが木の陰であろうとも敵と思しきものは全て攻撃せずにはおれないのである。

第2期

中期になると、この愛情欲求と敵意の衝動の splitting がより明確な形となって現れる。

#26 ホワイトデーにチョコを持参した cl は th に「目をつぶって」と言いながら th の向う脛を思いっきり蹴った。うずくまる th に対し cl は「足が悪いねん。意地悪するのは全部足。僕は優しくしてあげようと思うねんけど、足が悪いこととして困らす」と自分の中にある愛と憎しみの衝動がバラバラに行動化してしまい「コントロールが利かない」と表現。

cl は th に自分の全てを理解してもらいたい。全てを受け入れて欲しい、愛してほしいという切実な思いがある。できれば24時間共にいて欲しい。乳児を可愛がる母親のようであって欲しいと願っている。しかし、それは到底叶わない。だから、思い通りにいかないことに激しい憤りを感じるのだ。cl はチョコレートという甘い愛情を th に伝えながら、同時に th を蹴り、激しい攻撃性を向けた。チョコを持参した時点では彼は「僕はこんなに先生のことを愛しているんだよ。」「先生もそれに応えてね。」という気持ちだったのだろう。あるいは、バレンタインデーに th は何もしていないにも拘らず、ホワイトデーにチョコを持参したということは、th の愛に応えるためだったのかもしれない。

彼の疎通性の悪さや独りよがりな遊び方を見ていると、いかにも彼が空想の世界で生きているかのように思える時がある。cl からすれば、全能的 (all-good) な母親像を th に投影し、『先生は僕のことを実の子どものように愛してくれている』と信じて疑わないのだろう。このような全能的な母親像を th に見ているときは、cl は幸せの絶頂を感じる。だから、その fantasy を少しでも汚すものがあればそれを排除するために all-bad なものを投影し、攻撃的になるのであ

る。

だが、この時、clは衝動的にthを蹴った後、激しい罪悪感に苛まれ「ごめん」を繰り返す。そして、thが「何か私に腹が立つことがあるのかなあ」などと介入すると、しばらくして、cl「ぼく(次の)月曜日、来られへんねん。」と言う。次週はthの都合で曜日を変更していたのだが、clは都合がつかなかったのだろう。都合がつかないのであればthと相談して、他の曜日を調整すればいいのだが、clにとってみれば“曜日が変更された”ことだけで『自分を拒否された』『見捨てられた』と感じ、絶望的な気分になるのだろう。いや、この見捨てられた悲しみ、怒り、不安について意識できないがために、衝動的にthを蹴るという行動化をおこしてしまうのだろう。

thを蹴った後のclとのやり取りの中で「僕は優しくしてあげようと思うねんけど、足が悪いこととして困らす」と必死に弁明する姿からは、自分の中にある愛と憎しみの激しい衝動がバラバラに行動化し「身が引きちぎられそうだ」「自分ではもう、どうしようもない」「助けてくれ」といった悲痛な叫びが聞こえる。

林(1992)は境界例患者の転移の特徴として「対象欲求と接近のディレンマ」を挙げ次のように述べている。「境界例患者は治療の中で強い対象欲求を示し(対象飢餓 object hunger)、対象に即座の欲求充足を求め、激しい(自己愛的な)怒りや羨望などの原始的で強烈な感情を投射することが広く認められている。さらに、「このような対象の危うさを抱える患者では対象が一貫して存在することの保障を求め続けることが必要になり、ここから対象への不信や恐れと同時に対象へのしがみつきの生じると考えることができる。患者は常に対象を失う危機状態にあり、見捨てられ抑うつ^{うつ}の危険、対象喪失の恐怖にさらされているため、対象から分離独立することができないのである。」(林, 1992)

この事例のような年少のclを境界例患者と診断することは難しいが、clの対象関係のとり方、また、対象表象、自己表象の融合性から見

て、自我や超自我が統合される時期に何らかの固着が生じ、そのために防衛的、病的に投影同一化が存続していると考えられる。ただし、clが若干7歳の少年であること、また、治療の中で激しい行動化を示しつつもthの中和化を経て、現実検討能力を発揮し、激しい衝動を自我に統合していくことが可能であった、それに耐えうる自我の持ち主であったことは明記しておきたい。

先にも述べたようにこの時期、clが愛と憎しみの衝動をバラバラに行動化し、それらの衝動が交互に活性化され現れてくる様子が見られる。これはKernberg, O. F. (1966)の言った「交代する(alternating)自我状態」を表している。

例えば#28にはcl「上月先生^{こうづき}*は、ぼく以外のみんなから嫌われているの。」と言うので、th「じゃあ、Dちゃんだけが私のことを好きな?」と尋ねると、cl「うん」と答え、陽性感情を述べたかと思うと、しばらくして、cl「づき^{こうづき}こう(上月を反転させた言葉)時代は1秒しか続かない。」「嫌われてるから。」と憎々しげに語る。

また、テントの中で二人暮しをしよう^{しよう}と誘い、何でも「一緒にしよう」と甘えてきたりするが、thがclの思い通りにならないと、thに激しい攻撃性を向け、砂を投げつけたりしてくる。

この頃、clが「上月先生」と呼んでいる時は陽性の感情が語られ、「づきこう」と呼ぶ時には「づきこうは死ぬ」「づきこうが悪い」などの陰性感情が表明されている。

Kernberg, O. F. (1983)も自身の事例の中で「陰性感情を語るときは、まるでその前に語った陽性感情はなかったかのように見えた。」「それはあたかも、2つの自己があるかのようであり、それらは同じ強さを持ち、記憶の中では切り離されてはいないが、情動的に完全に切り離されており、意識体験において交代し合うようであった。」と述べている。さらに、「分裂は、そこでは、たんに自我の欠陥であるだけでなく、積極的で非常に力強い防衛操作でもあるように思われた。」として、投影同一化の防衛機能についても記している。

つまり、clは同一の対象に対して愛と憎しみ

*上月は治療者の旧姓

の相反する衝動を向けることが非常に困難なため、一方の感情を表明している時には他方を完全に切り離してしまうわけである。何故なら、その方が葛藤を抱えず、苦しまずに済むからである。だが、この split していた衝動を cl が行動化し、th が中和化していく過程を経て、徐々にそれらの衝動が意識に近付いてくると、cl はこれまで防衛していたものを抱えきれなくなり、混乱をきたし cl が葛藤に苦しむ姿が見られるようになる。

#34 ミニカーの中に「づきこうを閉じ込め」
散々いじめた後、cl は突然部屋の電気を消し、cl 「わあ、電気がこないよう。」と、心細げに可愛い声で言い、「でも、テントの中にいれ大丈夫。」と th をテントの中に誘う。そして、「ねえ、明かりを探して。」と甘えるように訴える。th は cl の態度の急変に戸惑いながら、懐中電灯を探すが、壊れていてつかない。

すると、再び「づきこうは何もしない!!」と怒り出し、th の前に来て気が狂ったように th の悪口を並べ立て、急に th の手を持って手の甲にキスし、「こんなこともするんや!!」と怒っている。

この後、th への攻撃性が激しさを増し、怪獣に砂を飲ませながら、わけの判らない事を言い出し、その砂を th の頭にぶっ掛けてくる。th は cl を制止するように「Dちゃん!!」ときつ口調で言うと、cl は「やっぱりな」と言う。

この時の cl は split していた衝動が同時に突出してしまい、自分の中でも収集がつかなくなっているようであった。これまで split することによって防衛されてきた衝動が同じ強さで見られるため、その葛藤に耐え切れなくなっているのだ。

#35にはぬいぐるみの目を手術すると言って、ぬいぐるみを切り刻んでしまう。しかし、その後激しい罪障感に苛まれ、再び手術をして治し始める。そして帰り際、cl は「本当は切ったらダメなんやろ。」と、ぬいぐるみを切り刻んでしまった攻撃性に強い罪障感を抱き、『こんなことをするなんてきっと先生は怒っているに違いない。』『見捨てられるのではないか』と th にというよりはむしろ、自分自身のサディスティック

な超自我に怯えていた。

自分でも抑えきれない衝動と戦いながら、th もこの時点ではその不安を十分に理解できていなかったため、cl は激しく敵意を行動化した後はキャンセルをしたり、また、夏休みの予定についても cl から「8月は休み」と言って、コントロールし難い衝動が暴走することを防衛していた。これまで防衛してきたものが意識に近づくとということは、ある意味、非常に無防備な姿をさらけ出すことを意味する。そこで、強い抵抗が生じるのだ。

この他にも、母親の相談室よりヘリコプターを取ってきたり、母親の相談室からしばらく出てこなかったりと母親との分離がスムーズに行われないことがある。これもまた、転移抵抗の行動化である。th に対してもっと甘えたいのに甘えられない。ずっと一緒にいて欲しいのにそうしてくれない、このような愛情欲求を十分に意識化することへの抵抗である。対象への不信任感、疎外感の強い cl にとってみれば、『もっと自分のことを愛して欲しい』という愛情欲求を示しても『絶対に受け入れられない』『求めて、拒否されるくらいなら最初からあきらめている方がまだ』と傷が深まらないように防衛しているわけである。

第3期

治療を開始してから1年が経過した頃、cl は自らのアンビバレントな感情をある程度意識化し、統合できるようになっていく。

例えば、th に対して cl が「いつも楽しく遊んでいる時に限って『時間だ』という理由で time up させられるのは嫌だ」ということを表明した後、「これ、ぼくがセンターを辞めるまで、ずっと預かっておいて」と言って、旅行ゲームで使ったお金をキティちゃんのポシェットに入れて th に手渡す。

これは、『ぼくは先生とずっと遊んでいきたいのに時間で切られるのは嫌だ。』という敵意を表明すると同時に『離れている間もずっとぼくは先生のことを思っているよ。』『先生もぼくのことを忘れないでいてね。』と愛情欲求、対象欲求を示している。つまり対象恒常性を獲得しつつあ

る過程を示しているのである。

また、「アホ上月」「うんこ上月」など、陰性感情を語る時にも「づきこう」ではなく「上月」と言うようになり、ここにも split していた相反する衝動の統合が見られるようになる。

さらに、#46には th に水をかけるなど、激しく敵意を表明した後、th「何か怒っているの?」と問いかけると「女がいじめる」と辛そうな口調でいじめられた話を始める。この後も cl の th への敵意の行動化は見られるものの、th がそれを受け止め、中和化する過程を経て、cl がカタルシスを得ることによって、友達にいじめられた話や、父親への敵意が語られるようになる。そして、cl の攻撃衝動や愛情欲求は本来父親や母親、友人へ向けられるものであり、th への転移を通してこれらの衝動のはけ口を求めていたことが明らかとなった。

転移の源が徐々に明らかにされる過程で、cl は次のような態度で父親への激しい怒りを表すようになる。例えば、cl が父親の真似をして「こんなに借金があるんや!」「子どものせいでこんなにローンがあるや!!」「もう、高校になんか行かされへんで!」と言い、その後、cl が音楽家になって借金を返済したりする。このことから、父親が経済的な愚痴をこぼすことで、cl がどれだけやり切れない、辛い思いをしているかが理解された。また、その傷つきから逃れるために、克服するために、父親に対して攻撃者への同一視が行われていることが明らかとなった。

第4期

終盤、th が転居することで cl と会うことができなくなることを伝えると、cl は最初は抑うつ的になったり、攻撃性を示したりする。しかし、その表し方はノートに「カキタン鈴木が毒キスをして上月の健康を奪う」話を書くなど、敵意と愛情欲求を言語化することにより、以前より安全な形でそれらの衝動を現すようになる。

また、cl の口から「th が辞めることが『嫌だ』」と言ったり、「寂しい」などと漏らし、「あーあ、地震が起きないかなあ」と言う場面もある。初期には、プラレールが片付けられているだけで“拒否された”と感じ、th との治療同盟も一瞬

のうちに破壊されていたが、今や cl は th への愛と憎しみの感情をパニックや激しい行動化を起こすことなく、言葉で伝え、th とより安定した関係が築けるようになった。

#61 cl「ぼく、視力検査嫌や」と言いながら何度も検査をくり返す。そして、おばあちゃんには「1.0も見えないなんて情けない。」と言われ、父親には「自分も眼鏡をかけているくせに『バカやなあ』」と言われ、『お父さんは視力のことばかり聞くから嫌や。「散歩してても『どうやった?』て言うねん。」「せっかくの気分が台無しや。」と悲しそうに言う。

この後、クラスの子にも視力のことでもバカにされ嫌な思いをしていることを怒りを込めて話し、cl「あーあ、今日は嫌な話ばかりだね。」「なんかお勉強みたい。」と言う。cl「昔は楽しいことが7つも8つもあって、嫌なことは1つくらいだったのに、今は嫌なことばかりや。」「昔は気持ちを解ってもらえたのに、今は解ってくれない。」と悲しそうにもらす。そう言いながら、ブロックを出してしみじみと「このおもちゃ、捨てられてしまったんだ。」「ぼく、もっと遊びたかったのに、捨てられたんだ。」「これで遊んでいると、赤ちゃんの時、楽しかった事を思い出すんだ。ぼくはずっと、大人になるまで持っていたかったんだ。」と半分泣きそうな表情で話す。

自分の気持ちを非常に感情を込めて話せるようになり、最後には cl「(話をして) ちょっと心が軽くなったよ。」と言って終わる。今までその激しさゆえに扱うことが難しかった過去の外傷体験にまつわる自らの感情、衝動について徐々に意識化し、自ら転移の源を探れるようになったのである。

また、therapy の中でも以前のような支離滅裂な攻撃性の出し方はなくなり、たとえ激しい怒りを向けてきたとしても、その後、「〇〇が嫌やった。」等と攻撃性の源を語るできるようになった。輪投げや人生ゲームも勝ち負けに対する過剰なこだわりが薄れ、恣意的なルールはあるものの、共に楽しめるようになり、疎通面でも改善が見られるようになった。

ただし、理論の所で述べたように投影同一化

と投影の理論的な概念の区別はできるものの、投影同一化と投影の明らかな境界があるわけではないことは明記しておきたい。

最後にこの事例の中でthが起こした逆転移について述べておきたい。clはsplitしていた衝動を行動化し、それをthが受け止め、中和化する過程を経て、それらの相反する衝動を意識化し徐々に統合していった。しかし、一見、治療が順調に進んだかのように見える裏にはthの逆転移によって引き起こされた転移抵抗の存在があることを忘れてはならない。

初期より、clはthを支配的に攻撃してきたが、この時thはまるで「陰湿ないじめに遭っているかのような」気分を味わっていた。さらに、相互交流の持ち難いclに対して「何か一緒にできないか。」とか、とにかく関わろうとする気持ちが先走り（逆転移）、clがいかに対象への不信、恐れを抱き、thへの“愛情欲求とそれを求めることへの恐怖”に苦しんでいたかについては理解できていなかった。

また、#6にプラレールが片付けられていることで激しい敵意を向けてきたclについても、その時点では投影同一化によるものとは理解できず、只々、clの攻撃性を受け止めるのに精一杯であった。

そのため、#13#14とclがtherapyの中で“まちのえき”という理想郷を作り、ようやく自らの居場所を見出そうとしていた時に、thは突然次週のtherapyが休みであることを伝えている。もし、この時点でclの対象飢餓感と激しい攻撃性について理解、共感があったなら、“持ち上げておいて落とす”ようなことはしなかったであろう。おそらく、この時のthは『こちらが一生懸命に関わろうとしている』にも拘らず“いわれのないいじめ”に遭い、欲求不満に陥っていたのだろう。そのため、“突然の休み”を伝えることによって無意識の攻撃性を発揮したと思われる。

このようなthの逆転移によって発揮された無意識の攻撃性は、clを一層傷つけ、人間不信、対人恐怖へと導く結果となった。

#15に来所したclは「なんでここに来るの？」と訊ね、『何故、こんなに苦しい思いをしてまで

ここへ来なければならないのか』『ようやく自分の生きる居場所が見つかった、孤独から抜け出せるかもしれない、と思ったのに、やっぱりthもclを自分の都合で切り捨ててんだ』と深く傷つき、奈落の底に突き落とされたような気分を表現している。

だが、この時もthはclの傷つきについて表面的な理解しか示していない。それは自分が犯したミスへの罪障感と共にclから見捨てられるはしないか、自分は治療者として評価されているのだろうか、などという不安に捉われていたからである。

したがってclは#16、#17と続けてキャンセルをする。これも当然の結果であり、ここで中断せずにその後、1年半もよくclはtherapyを続けてこれたと改めてclの自我の強さを思う。

そして、このことを契機にclのthへの攻撃性の行動化は激しさを増す。これはまさしく、thの逆転移によって引き起こされた転移抵抗の表れであった。もし、たとえthがミスを犯したとしても、その後“clがいかに深い傷を負ったか”“孤独に耐え生き延びてきたclにとってthがtherapyの場がどれだけの意味を持った対象であったか”について真に理解し、共感できていたならば、clは砂を浴びせたり、足を蹴ってきたり、また、ハサミを向けてくるなどの激しい攻撃性を発揮する必要はなかったであろう。

また、治療ももっと迅速に、かつ、効果的に行われたに違いない。今回、投影同一化について学ぶことにより、より深くclの心の深層をclの心的現実を理解することができた。また、同時に、thが“clがなぜ投影同一化を起こさざるを得なかったか”について理解できていなければ、thはclの歪んだ現象の場（転移）に巻き込まれ、逆転移を起こし、治療に困難をきたすということも明確になった。

IV. まとめ

Kernberg, O. F. の投影同一化の理論を事例を通して具体的に検証することにより、筆者はthとして、clの心的現実をより深く理解するこ

とができた。また、対象表象、自己表象が曖昧なために、投影同一化を起こしていたclが精神的治療を通して、thに対し、ある程度一貫した対象関係を築けるようになった過程を提示できたと思う。

今後は、投影同一化を起こさざるを得ないclの苦しみ、怒り、孤独、愛情飢餓感を理解するとともに、投影同一化をclの診断にも生かしていきたい。つまり、thの介入によってclが自己表象、対象表象を統合していく自我の力があるかどうかを見極めることによって、clの診断の指針の一つにしていきたいと考える。

いずれにせよ、精神分析の理論を学ぶことがclへのより深い理解と、thの共感能力の向上に寄与されることが重要である。このことを座右の銘とし、今後の治療に臨みたい。

付 記

本論文の作成にあたり、ご多忙の中熱心にご指導頂いた船岡三郎教授に心より感謝し、お礼申し上げます。また、中田洋子先生、仁木一栄先生、小宮昇先生を始め、船岡教授の勉強会に出席されていた多くの先生方の適切なご示唆、ご助言を頂き、ここに謝意を表します。最後に本論文作成には家族や周囲の多大な協力と理解があったことを記し、感謝申し上げます。

参 考 文 献

1. 船岡三郎 人間のこころの科学 京都私学教育相談所 1987
2. Freud, A. 自我と防衛機制 岩崎学術出版 1936
3. Greenson, R. R. The Technique and Practice of Psychoanalysis Volume 1 International universities press, Inc. 1967
4. 林 香織 治療同盟の臨床的意義と転移神経症との関係 京都女子大学大学院家政学研究科児童学専攻修士論文 1992
5. Jersild, A. T. 船岡三郎訳 自己を見つめる—不安の解決と共感— 創元社 1975
6. Kernberg, O. F. Structural derivatives of object relationships. Int. J. Psycho-Anal. 47; 236-253, 1966
7. Kernberg, O. F. Early ego integration and object relations, Annals New York Academy of Sciences; 233-247, 1972
8. Kernberg, O. F. Borderline Conditions and Pathological Narcissism JASONARONSON 1975
9. Kernberg, O. F. 前田重治訳 対象関係論とその臨床 岩崎学術出版 1983
10. Kernberg, O. F. Severe personality disorders: Psychotherapeutic strategies. New Haven, CT: Yale Univ. Press., 1984
11. Kernberg, O. F. Projection and projective identification: Developmental and clinical aspects. Monographs of the j. of the Amer. Psychoanal. Ass.; 795~819, 1986
12. Kernberg, O. F. 山口泰司訳 内的世界と外的現実 (上下) 文化書房博文社 1992, 1993
13. Kernberg, O. F. 西園昌久監訳 重症パーソナリティ障害 現代精神分析双書 第II期第19巻 岩崎学術出版 1996
14. 仁木一栄 投映と投映性同一視—境界例患者における対象関係の一特性について— 京都女子大学大学院家政学研究科児童学専攻修士論文 1994
15. 仁木一栄 投影性同一視—境界例患者における対象関係の一特性について— 順正短期大学研究紀要第23号別刷 (1994年度) 1995
16. 牛島定信 境界例の臨床 金剛出版 1991